

## 佐藤茂樹先生を偲ぶ

新原 明

野山を運動靴をはいて飄々と歩かれ、時折立ち止まっては、白髪のいが栗頭をなでながら生物をじっくりと観察され探究される先生のお姿を、いつも思い出します。

先生は、『生物への面白さを養う切っ掛けは、自然とのふれあいにある』という考えをいつも持っておられたようで、授業での板書にしても、葉一枚を非常に丁寧に正確に書かれ、しかもできるだけ速く書こうとなさったのでしょうか、左右両手を巧みに使ってまるで二刀流の剣士のようにいらっしゃいました。また、学校自然博物館をつくることを絶えず考えられていて、生物教室の前の廊下に、展示コーナーを設けられ、ご自分が採集された各種の生物や学校内外の方々から提供された標本を展示され、採集場所・採集期日・名称の由来、その他その生物に関するくわしい解説を必ずつけておられました。陳列品は四季折々の野草、各種の蝶・貝殻・化石など、常にテーマを持って工夫されていました。当時生徒であった私も、この展示コーナーを見るのが楽しみで、マムシグサ・ギンリョウソウ・ナンバンギセル・シダ植物の前葉体・ギフチョウ・デンキウナギ・牛や豚の胎児などはじめて見るものが多く、生物に興味を持つようになった大きな切っ掛けとなりました。

先生の研究熱心には、つくづく敬服いたしますが、今も滝川高校の標本室には、タキガワゾウ *Parastegodon inflequens* Shikama の『顎骨の一部とそれから生じた臼歯の一本』の化石があります。これは大正15年、今は故人になられたが、当時本校の英語教諭であられた柴田寿栄次先生が、中学2年生の時に自宅の縁の下にあったものをたまたま見つけられ、学校に持ってこられて寄贈されたものですが、先生はこの化石をいろいろ調べられ、最終的には、昭和8年に現横浜国立大学教授鹿島時夫博士により命名されたものです。

昭和43年「核酸と生物の進化」について先生が講演されたのを聴講したことがあります。先生のDNAに対する知識の深さと、新しいことに対する探究心の深さには本当に感心いたしました。この時の講演は、日本生物教育会札幌大会で『銀賞』を受けられたと聞いております。当時、遺伝子としての核酸が高校教育に取り上げられ始めた時期で、昭和42年度から使用する10種類の高校生物教科書に対する先生の調査によると、『DNAの遺伝情報』について記載しているのは50%で、『伝令RNAや運搬RNA』についての記載は20%の状況であった、とのことでした。

問題に対する研究の深さと熱心さがいかに大切であるかということ、言葉を通してではなく、実践において

示して下さい先生のお姿をいつまでも心にとどめておきたいと、思い続けております。

(しんばら あきら：滝川中・高等学校教諭)

## 兵庫県生物学会と父・佐藤 茂樹

佐藤 博保

この度滝川学園中・高等学校の新原先生から、兵庫県生物学会の記念誌が発行されるので、私の父である佐藤茂樹の兵庫県生物学会への貢献、業績や思い出などについての資料の提供をもとめられた。父は戦前、戦後の二度にわたって昭和45年まで滝川学園に奉職し、生物(戦前は博物)の教師として勤めるとともに、兵庫県生物学会(戦前は兵庫県博物学会)の一員として、兵庫県とその周辺の生物や地質・鉱物を研究したり、高校生や中学生、小学生に生物採集などを教えたりしていた。父は滝川学園を退職後、私の勤務先の移動にもなつて鹿児島に行き、昭和48年に亡くなった。そのとき父の手もたには、多くの蔵書とともに兵庫県生物学会誌などの資料、多数の植物、鉱物標本などがあつたが、その多くは父の死後、滝川学園の生物の先生の求めにしたがつて学園に寄贈した。新原先生のお話では、いまではそれらは散逸してしまつて何も残っていないとのことである。そのためここでは、きわめて少しだけ残っている資料と、私の記憶とから父と生物(博物)のつながり、とくに兵庫県生物学会との関係について記すことにする。

### 1. 戦争前、昭和12年まで

父は明治22年に茨城県に生まれた。実兄の鶴町猷が茨城県博物学会で活動していたことの影響もあつてか、日立市で小学校に勤務していたころから博物に親しんだようである。大正9年9月8日に、当時の滝川中学校の岡校長のお誘いをうけて着任したのが、兵庫県にお世話になったはじめてあつた。その頃、山陽電車で板宿の停留所はまだなく、車掌に頼んで電車を止めてもらったという。父はその当時からすでに、野山を跋渉して昆虫や植物、鉱物を求め歩いたことと思われるが、兵庫県博物学会とのかかわりは、学会が創設された昭和5年から始まるようで、その様子はつぎに全文を掲げる感謝状からうかがわれる。

「感謝状 昭和五年五月本県下中学校博物科担任教員打合せニ於テ本会設立ノ議決スルヤ君推サレテ中央創立委員トナリ会ノ成立ト共ニ会計幹事ニ挙ゲラレ以来八星霜公務励精ノ一面煩瑣ナル事務ヲ執リ更ニ郷土研究ノ上ニ幾多ノ業績ヲ挙ゲラレ本会ヲシテ重キヲナサシメラルルニ今回東京府ノ礼ヲ厚クシテ招聘セラルルニ会フ本会ノ損失コレヨリ大ナルモノナシト雖亦如何トモスベカラ

ズヨッテ茲ニ粗品ヲ呈シモッテ感謝ノ意ヲ表ス 昭和十二年五月九日 兵庫県博物学会長 正六位勲六等 阿部良平(印) 佐藤茂樹殿

私の家には当時父が会費を集めていた帳面があったのだが、いま探しても見つからない。ただ父の私信の封筒に「神戸市須磨区前池町一丁目二 板宿アパート 兵庫県博物学会会計部 振替口座神戸三七五七番」と言うゴム印を押したものが残っている。

兵庫県博物学会会誌は昭和6年1月に創刊号と第2号が出て、14年の17、18号までは毎年2冊づつ刊行された。15年に19号、16年に20号がでていいる。『兵庫県博物学会会誌総目録』(昭和16年5月)から父の投稿をみると、「昆虫標本の処理から」(1巻17ページ)、「奥谷国有林動物管見」(3, 39)、「板宿八幡神社境内所産の蛾について」(7, 58)、「神戸丸山衝上逆断層保存の経過」(8, 33)、「神戸市須磨区西方鏡肌の露出地略報」(8, 48)、「須磨背山の地質調査と鏡肌の再調査報告」(9, 14)、「カメレオンを飼って見て」(10, 75)、「丸山北麓大断層略報」(11, 10)、「満州旅行の一印象」(11, 104)、「寺前(神埼郡)植物採集報告」(12, 89)、「神戸丸山付近地質図」(12, 101)、「同; 付説」(生村香氏と共著, 12, 102)、「花岡鉱山の地質鉱床」(14, 22)、「関門海峡トンネル内地質管見」(17, 53)、「アサクサノリの一観察」(20, 75)と多岐にわたるが、地質鉱物関係が多い。

ほかに本会記事として、「二杉君の思出」(6, 11)、「石川先生」(10, 5)、「創立十周年を祝福して」(20, 11)がある。ほかに、「つたのは」のペンネーム(?)で、「似非貝俳句」(5, 1)というユーモア記事もある。25句からいくつかを拾うと、

「あめつちも たひらぎにけり 御代の春」

「小姑が 惜しげなくさす よめがかさ」

「つとこぶし 振り上げて見りゃ 可愛い孫」。

これらの中で、とくに丸山衝上逆断層の調査は学会としても一つのハイライトだったようである。林田区(いまの長田区)妙泉寺の丸山にあるこの断層の発見の経過について、上記「神戸丸山衝上逆断層保存の経過」によれば、「神戸支部主催の六甲地塊調査会が、第2回目を昭和7年10月16日に妙泉寺を中心に付近の調査を行った。今は故人になられた支部幹事、二杉賀久三郎君が熱心な研究者で、つとに此の断層の特異な点に着目していたため、特に案内の労をとられたのであった。当時幸に土地会社が此の丸山の開発を行ってゐて、山の南西部を切り崩し地均しをしてゐたので此の発見に導いたのであった。其の際御指導下さった(京大の)上治(寅次郎)先生が衝上逆断層と断定され、調査に参加した会員一同も、大なる収穫に雀躍した事である。」父がこの調査を行ったときの詳しい踏査地図やメモが我が家に残っている。

戦前のこととしても一つ、タキガワゾウの化石にふれなければならない。『朝日新聞』昭和39年6月29日号月曜サロン「太古の郷土の姿、佐藤茂樹さんの研究から」には次のように述べてある。「滝川象の発見されたいきさつを説明すると、現在滝川学園の英語教諭柴田寿栄次さんがまだ学園の中学二年だったころの大正十五年四月十日「明石でこんなものを拾った」と学校で生物教諭をしていた私のところへ持ってきた。旧象の歯とだけはわかったが、それ以上はわからぬので、ちょうどそのころ学園を訪れた現横浜大の鹿間時夫博士を通じて鑑定を求めた。その結果、明石象と仲よく住んでいた別の象であるとわかり、現東大の高井冬次博士から滝川象と名付けられた。」

## 2. 戦後(昭和24年から48年まで)

父は東京では清家正先生(有名な建築家の清家清氏の御父上)が校長をされていた東京府立電気工業学校に勤務しつつ、東京府(のちに都)でも東京都中等学校生物学会理事、全国中等学校博物教育会理事、東京都科学教育連合会理事などをしていいたが、戦雲急を告げるときで、20年の帝都大空襲で家も焼けてしまい、学校に仮住まいする状態だった。生物研究もままならない状態であったと思われる。

終戦後、新制中学校として創設された大田区立大森第六中学校の初代校長を最後に東京を離れるが、この時期にも、生物教育関係の研究会の結成に関わっていたようで、つぎの感謝状をいただいている。「感謝状 佐藤茂樹 右の者本会結成に努力し結成以来は本会幹事として東京都の理科特に生物教育振興に尽された功績は極めて大きいここに厚く感謝の意を表します 昭和二十四年三月 東京都中学校理科教育研究会長 有元石太郎」こうして父が再び滝川学園高等・中学校にもどってきたのは昭和24年4月であった。(このとき筆者は小学校6年生になったところであった。)

同年5月には兵庫県生物学会理事を拝命し、25年には「神戸生物クラブ」の顧問となった。これは私の記憶が正しければ、大丸デパートの肝入りで小学生や中学生の植物、昆虫、鉱物などの採集の指導や鑑定会、展覧会などを開くための会であった。植物や昆虫の専門家は多いので、父は鉱物の鑑定をよくやっていた。このころ父はもう60歳になっていたのだが、もう戦争の心配もなく、東京時代に校長としてやらざるを得なかった労組相手の交渉などからも開放されて、いちばん楽しい時期であったと思われる。滝川学園の生物部の生徒たちと植物や昆虫の採集に、白川峠で化石の採集にと歩きまわっていたし、また、狭い庭に植物標本を作るための新聞紙を干していたりした。父は割合、新しいものに飛び付くところ

があり、25年には、神戸市指導課から青少年補導研究費の交付をうけて「純潔教育」フィルム原画を描いたりしていた。これは今どきからは想像もつかないようなテーマだが、青少年に正しい性教育をしなければという時代であった。私は父が何だか46XXとかXYとか言っていたような記憶があり(性染色体のこと?), 中味は全くサイエンス的なものであったと思う。昭和30年2月1日付けの『朝日新聞』の記事によると、「同(佐藤)先生は戦後の性混乱期昭和二十四年には“性の目覚め”の幻燈スライドの原画約三十枚をつくって、神戸市指導課から市内各所に配布、二十五年には第一回全国幻燈、映画シナリオコンクールで、その純潔教育への努力をみとめられ、文部大臣賞を受けた。」とある。正しくは26年に文部省第1回映画幻燈シナリオコンクールで、「生命の科学」という題目で文部大臣奨励賞を受賞している。

この間、26年には日本生物教育会第6回大会(大阪大会)で「生物教材の発展的取り扱いと純潔教育」の発表を行い(同大会記念誌, p.15), 淡路島岩屋で磯採集、『兵庫生物』に「明石海峡のプランクトン」を書き、NHKの放送で「北部但馬の海岸線を語る」(県観光課からの委嘱)と、なんでも屋である。27年には神戸放送局(民放)で「昆虫のお話」、28年には学制80周年に際し、文部省から表彰された。この年、『兵庫生物』に「温古知新」、「西六甲丸山衝上断層」、29年には同誌に「アルカロイド植物」、30年に同誌に「野生植物とアルカロイド」、市教育植物園での研究会講演「岩石と土壌」、31年には県生物学会城崎総会で「新生物教科書の特徴」を発表、『兵庫生物』に「天然記念物コヤスノキ」、「高等学校生物科指導について」、「ツメタガいの穿孔部位」を書き、32年には県生物学会姫路総会で「石の宝殿、竜山石」を発表、摩耶山採集会で「六甲連山の地形地質」について話し、神戸新聞会館主催の「丸山断層、屏風浦バスター」で指導し、33年には岡村はた、古川博二、室井緯先生と共著で『動物観察事典』(六月社)を刊行し、『兵庫生物』に「クワモドキの観察」、34年には県生物学会竜野総会で「天然記念物屏風岩」を発表、『兵庫生物』に「アルカロイド植物と成分」、室井先生らと『六甲の自然』(六月社)、35年には、のじぎく文庫『兵庫の自然』(兵庫県生物学会)で渋谷久雄先生とともに編者代表、『兵庫生物』に「タキガワ象の由来」、「浅草海苔の今昔」を書いている。この10年余りが父のいちばん油の乗りきったところだったかと思われる。

35年4月にはもう70歳を超え、滝川学園の常勤の講師になった。この35年、スライドと解説からなる「郷土の生物進化史」を完成させている。これを36年には県生物学会明石総会で発表、37年には日本生物教育会富山大会で発表している。昭和36年10月には明石天文科学館で

「100万年前の明石湖 大化石展」で「化石をおもな資料として組みたてた郷土の生物進化史(兵庫県生物学会編)」が開かれ、父の描いた図が多く出展された。ここにはタキガワゾウの化石も展示された。また、『兵庫生物』に37年には「白川産植物化石予備調査資料(1)」、39年に「修学旅行で得た九州の植物」、40年に「白川産植物化石予備調査資料(2)」を書いている。75歳にして「予備」と言ったところに父の気持の若さを汲んでいただけたかもしれない。昭和41年には、兵庫県生物学会創立20周年において表彰をうけている。42年には『兵庫生物』に室井先生と共著で「岡山県牛窓町断層地帯層群の調査」を発表している。これは室井先生と牛窓に出かけて調べた報告である。

この年日本生物教育会松本大会で「核酸と生物の進化」の発表をし、これについて43年に『兵庫生物』に「核酸の問題と生物の進化」として執筆しているが、松本大会での発表が優良と審査され、43年には日本生物教育会札幌大会の席上で銀賞として表彰され、表彰状のほかに御下賜金による記念品をいただいた。このとき79歳。そのときの様子は『兵庫生物』6巻2号(昭和45年)に「北海道東部の植物」を寄稿した中に父が記しているので少しだけ引用させていただく。「昭和43年8月、日本生物教育会第23回全国大会が、北海道札幌市で開催された。中路正義会長から6月末に、特に私に出席するようとの案内があり、(中略)意を決して札幌大会にも参加することにした。(中略)同室に兵庫県生物学会多胡会長さんが、先着でいらっしやったことでお蔭様で総てにまごつかず行動することができた。(中略)拙作の核酸と生物の進化(スライド)が、全国の若い研究者に混じって表彰の仲間に加えて頂けたことは、実に兵庫県生物学会会員の諸先生の寄せられた日ごろのご指導の賜ものと感謝にたえない。」少し長くなったがこれを引用させていただいたのは、ここに父の兵庫県生物学会の先生方への気持の総決算のようなものが込められていると思うからである。父はこの後、43年に私学連合から、「郷土の生物進化史」編集の奨励交付金を受けている。

45年に、父は前後2回38年間もお世話になった滝川学園を退職し、鹿児島大学に転任する私とともに南国鹿児島に移り住んだ。茨城県から兵庫県、東京、また兵庫県、その後の鹿児島だった。此の年で81歳。45年5月には兵庫県生物学会から感謝状を頂戴した。父はこの後にも、鹿児島県育英財団に申請して研究生に採用されて「鹿児島県の自然とその進化」の題目で助成金をいただき、植物採集をしたり、火山灰地特有のシラス台地で発見される貝の化石を集めたりして元気にすごしていた(『兵庫生物』誌へ、45年に「学校科学博物館の一例(滝川博物館)」、47年に「シラス台地で海の貝」を寄稿)が、48年

1月28日にこの世を去った。84歳だった。

父の一生は、兵庫県生物学会（戦前は博物学会）の諸先生方からいただいたご厚情ぬきには全く語ることができない。この紙面を御借りして厚く御礼申し上げます。また、父が38年の長きにわたってお世話になった滝川学園の校主殿や各代の校長先生をはじめとする皆様にも厚く御礼を申し上げます。

（さとう ひろやす：三重大学工学部教授）

## 森為三先生を偲んで

三木 正士

私は1930年に生れ、今夏65歳となります。新制兵庫県立農科大学1期の受験に、生れて初めて篠山を訪ね、旧連隊跡の学舎（兵舎跡）での面接で森為三先生とお会いした。いま、当時の先生と同じ年齢となり、年月の経つ早さを感じます。

戦時中の工場動員、敗戦後旧制中学卒業後、学制改革で、新制高校3年編入、翌1949年卒業。旧友4人と受験し、兵舎跡一階の寮に転がり込みました。1人はその後北大に合格し、1人は下宿し、2人残りました。私の他は神戸以外の出身でした。旧制高校中退、満州医専中退など多彩な顔ぶれの同期生と、丹波篠山町で生活し、私は卒業後も2年半、計6年半の青春時代を過ごしました。

戦時中に設立された神戸医専の予科が、敗戦翌年、旧連隊跡に移り、私が入学した時は、予科（白線・マント服）の2・3年と実験室・図書室・食堂などは共用でし

た。講義室だけは兵舎の二階を、寮は一階を改造したものでした。講義・実験は教養の2年間は殆んど予科の先生方が兼務されていたようです。

私達は、森先生を予科長と呼び、動物学の講義を受けました。今年1月の阪神・淡路地震で自宅二階の書棚の相当数の書類が落下し、後日、片付けた時、動物学の赤茶けたノートを見つけました。森先生の講義は黒板全面に用語を書かれたのですが、ただ $u \cdot n \cdot m \cdot w \cdot v$ などの筆記体は判読に苦労して記録した思い出があります。

当時、学制改革を機に岸田県知事のもとで医大予科の職員の処遇と地元の要望などで、農科大学が設立されたのだと思います。学長は北海道大学から三宅捷先生を招聘し、学長官舎（武家屋敷改造）、送迎自動車（運転手付）を準備され5月に着任されました。挨拶の中で「諸君を紳士として扱う」と言われたのが耳に残っています。森先生は予科生を2年間指導された後、1951年より農大副学長となられ、私は三回生で発生学の講義・実験を受講することになりました。系統的な発生学のドラマを面白く聴いたことが、思い出されます。イモリやカエルの実習材料は豊富で、広島大学から来られた宮田助手の切片標本が多数ありました。しかし、臨海実習が単位取得の条件とかで、夏休み、香住の水産高校を借りて、寮で食事・宿泊、実験室でウニの発生・プランクトン観察などをやりました。二回生も共に参加で、夜遅くまで騒ぎ、あの温厚な森先生に厳しく叱責されたのも古い思い出です。

練習船でプランクトンネット引きや、洞門めぐり、近



兵庫農科大学校舎。  
開学当時一階は寮、  
二階は講義室。3年  
後に一階は研究室に  
改造された。

（元篠山連隊兵舎、  
現鋳物工場の倉庫）